

たかす新聞



★夏休み★

8月13日朝霞市三原の”焼肉キング”にいった。開始前から大雨が降り、連絡ミスによりおすけを置いてけぼりにしてしまうという失態。食べ放題といえばゴムの肉のイメージだったが、ここはゴムではなかった。味噌味のホルモンは異常にうまかったので、次は食べまくるつもり。男たちは2次会もせず帰宅。コルクは酔うとほふく前進をするので次はコルクが泥酔するところを見たい。
参加:ささ3人、せきね3人、ひろし、こるく、につと、おすけ



僕たちの夏の一番

新島の遠泳大会に友人のせきね、ひろし、若者グループ6名と一緒にやってきた。今回の注目点は僕とひろしが大会最長のカテゴリーである4.5kmへの参加することだった。前日の夜、竹芝橋橋を出港するとき、いつもは大量の酒を買い込み、ほろ酔い気分の中で船の中で一晩を過ごすひろしが、翌日への体調を考え、一滴の酒も入れずに就寝。今回の大会への意気込みが伝わってきた。ひろしは今回の大会に備えて6月だけで60kmというとてもじゃない距離の泳ぎこみを敢行。完泳という目標に向け、惜しみない努力をしてきた。僕も前日は飲みたいビールを控え、また、ここに向け、とてもひろしには及ばないが、自分なりに練習をしてきた。新島に着き、お世話になる民宿でおいしい朝食をとった後、数時間休憩し、いよいよ大会が開かれる浜へ向かった。準備運動とアップを済ませ、いよいよスタートの時が来た。僕はスタート直前にゴーグルのレンズをいじってしまい、ゴーグルを曇らせてしまった。見づらい視界は長丁場ではかなりのストレスになることが予想されたので、僕はひろしに「俺、スタートはちょっと遅れるわ」と言って、スタートの合図があった後、海水でゴーグルをジャブジャブ洗ってからスタートした。ひろしを含め、かなりの人が自分より前に泳いで行った。数分泳ぐと、ひろしを発見した。なかなか快調な泳ぎだったが、僕もうまく力が抜けていい泳ぎができており、さっと、ひろしをパスした。その後は荒波の中、夢中で泳ぎ、何とかゴールすることができた。8分5分10秒という記録で、良くて90分だと思っていたので、かなり自分にとってはいい記録だった。

その後、なかなかひろしは来なかった。

前回、冗談まじりの「無念のリタイア」という記事を書いたものの、本心はひろしの努力は報われてほしいという気持ちだった。約15分後、ひろしはラフフラになりながらゴールした。自分もそうだったが、波に揺られ過ぎて平衡感覚を失ってしまっていた。僕はひろしの肩をたたいて賞賛した。ひろしも満足気だった。その後は温泉に浸かり、疲れをいやした後、民宿で同行した若者グループと一緒に飲んだ。僕は疲れて少し頭が痛かったので、3本ほどビールやチューハイを飲んだ後、ウトウトしてしまっ。ひろしは上機嫌で、次々と酒の缶を開けていった。20本近くの缶を開け、酩酊状態になったひろしは「俺は人生を完泳した男だよ！」と言っていた。「なんだそれ!？」と思ったが、まあ今日はいいやと思った。その後、花火をやったが、風が強く、地面に置くタイプの花火は倒れるので、若者は無理をしてそれらの花火を手を持ってやっていたが、ひろしはみんなが「地面に置くな!」と言ってるのに、怖くなって地面に置いてしまい、倒れてさらに危ない状況を作ってしまった。僕はひろしに「手に持つ勇氣がないならやっちゃだめだ!」と注意したが、全く聞く耳を持たず、また花火に火をつけようとしていた。いつもは暴走タイプの若者リーダーのオダカ君に注意されるくらい、暴走モードのひろしだった。その後はジェンガをやったが、ゲーム以外のところで膝をテーブルにぶつけてブロックを倒したり、テーブルの酒をこぼしたりとやりたい放題のひろしだった。翌日、浜松町に帰ってくると、夕立が降り、それが止むと、空に大きな虹がかかっていた。それを見つめるひろしの目は昨日の夜のことは棚に上げて自信に満ちていた。人生にはいろいろなことがある、本当にいろいろなことがある。ひろしの昨晩の言葉を借りれば、その人生の荒波を乗り越え完泳する自信をひろしはこの2日間で持ち始めたのではないかと一緒に虹を見ながら思ったのだった。

(中村)

コーヒーブレイク ~ニュースでひとこと~

<p>星野仙一 ・原を泣かせた男はれのひ ・一生に一度と言えたいと思うな 小室哲也引退 ・コルクはtrfのファンです アメフトタックル ・あそこまで露骨にやれと言っていない ワールドカップ ・スクランブル交差点痴漢は自業自得</p>	<p>逸見政孝 ・”ガン再発す”を読みたい 新幹線殺人 ・ナタマ痛そう オウム死刑 ・さよならサンジャヤ</p> <p>4人の研ナオコを分析してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研ナオコは研究者タイプ ・華ナオコは格闘タイプ ・堅ナオコは守備タイプ ・犬ナオコはドッグタイプ
--	--

原辰徳バット投げ

-----1-----

あれは92年の出来事ですね。怒りというか、様々な思いが込められていたんですよ。この年優勝はヤクルト(野村監督就任後初優勝)で、序盤からリードしていました。これを追いかけたのはまさかの阪神(当時5年最下位)で、最終的にはこの2チームが「史上希に見る大激戦」を繰り広げました。ただし、巨人と広島も終盤の終盤まで優勝の可能性がありました。まさしく史上希に見る大激戦だったわけですが。さて1992年7月5日、神宮球場のヤクルト-巨人戦。この時巨人はどういう状態だったかといえますと、首位・ヤクルトに1.0ゲーム差と射程に捉えていました。しかしながら巨人はずっとヤクルトを追走していたわけではありません。開幕から負け続けていたのです。4月・5月を16勝26敗と大きく負け越し、最大10.5ゲーム差を付けられていた。この絶不調の戦犯として挙げられていたのが就任4年目を迎えた藤田元司監督(長嶋監督ではありません)と、当時の主砲・原辰徳。原はこの年アキレス腱痛を抱えており絶不調、打率1割台にあえいでいました(世代交代ではなく、それでも主砲として扱われていました)。「**原は終わった**」「**原を使うな**」と藤田監督にも非難が集中していました。こんな巨人を救ったのが、西武からトレードで獲得した大久保博元でした。大久保は西武では干されていましたが、巨人で活躍の場を与えられると本塁打を量産。「大久保が本塁打を打つと負けなし」という神話も生まれました。これに釣られるかのように原も本塁打を量産し始めてチームも連勝に次ぐ連勝、ついにヤクルトを射程に捉えたわけですが。そして1.0ゲーム差まで詰めて迎えたのが7月5日です。

試合はヤクルトペースで進んだものの、8回に大久保がソロ本塁打で追撃(2-4)。「大久保が打つと負けなし」神話を信じた藤田監督は、2点のビハインドながら抑えの切り札・石毛を8回から投入(3者三振)。そして迎えた9回の表、1アウト。ここで打席を迎える3番の岡崎が、原にこう言いました。「**原さん、当たってでも出るのでホームに戻して下さい**」岡崎は四球で出塁。原が打席を迎え、そしてあの伝説の本塁打が生まれます。岡崎に対する思いもあったでしょうし、自身の不甲斐なさに対する思いもあったでしょう。原が本塁打一つであそこまで感情を高ぶらせたのは、後にも先にもあの1回だけです。単純に「怒り」という言葉で表せるものではないですし、ましてやデッドボールを食らって怒ったなんてレベルのものではありません。この本塁打で同点に追いついた巨人はその後勝ち越しに成功し、ヤクルトとのゲーム差を0にしました。そしてオールスター前に単独首位に立ち、首位で前半戦を折り返すことになりました。

-----2-----

この年のジャイアンツは斎藤雅樹投手以外の投手陣(特に先発陣)の不調、主砲・原さんもアキレス腱の故障が響き5月まで打率1割台の絶不調。5月半ば、チームは首位スワローズから10.5ゲーム差の最下位に落ちました。そんな中、ジャイアンツはライオンズから大久保選手を獲得(中尾を放出)、若干20歳の**石毛博史**投手をスッパーとするなどカンフル剤を投入。6月に入り原さんが徐々に調子が上がり、デブ大久保がホームランを打ってジャイアンツは負けのないジグスが生まれました(事実移籍以後7月4日時点で、ホームランを打った試合はジャイアンツ11連勝中)そして、7月5日。前日までジャイアンツは7連勝の快進撃で2位に浮上、首位・スワローズとのゲーム差僅かに1.0ゲーム。この試合に勝てばゲーム差なしになる試合でありました。先発はスワローズ伊東昭光(現ヘッドコーチ)、ジャイアンツ桑田真澄。ところが、先発・桑田が序盤で4失点を喫し、7回を終わって1-4の劣勢に立たされた。そんな中、8回表デブ大久保がホームランを放ちました。「デブが打てば負けなし」そう信じた藤田さんは8回裏から石毛を投入。石毛投手は期待にこたえ3者3振りに抑えました。そして9回表、1アウトから3番・岡崎選手が四球で出塁。そして4番・原さん。1球目 カーブ ボール
2球目 スライダー 見送りストライク
3球目 内角高めスライダー ボール
4球目 外へのスライダー ボール
そして伊東が投じた5球目。内角ややシュートかかったストレートを強振。打球はレフボール際上段まで運ぶ同点2ラン。興奮のあまり原さんはバットを投げつけました。(余談ですがそのバットはあわや、ネクストバッタースサークルにいた駒田さんに直撃するところでした)その後試合は延長戦に入り、11回表大野雄次さんが角三男投手から左中間へ勝ち越しのホームランを放ち、5-4でジャイアンツがリード。その裏、石毛投手が3者凡返に抑え、10ゲーム差以上はなされたスワローズに追いついた試合でありました。8回裏から登板した石毛投手は9回裏には2アウト満塁、カウント2-3のところまで追い込まれましたが、スライダーで三振に斬り、その後11回まで77球を投げ勝利投手となりました。因みにこの試合はフジテレビが放送を担当し、視聴率はその年ジャイアンツ戦中継の中で最高の30.4%を記録しました。(引用)

ヨギ

数か月前、会社の中田さん(仮名、30代女性)が、当時スマートフォンにしたばかりの僕に、「中村さん、スマホにしたならLINEやらなきヤダメッすよ、そしてLINEPOPっていうゲームをやらなきヤダメッすよ!」と高テンションで言ってきた。LINEがいかなるものかはわからなかったが、僕は言われるがままLINEをインストールし、LINEPOPも始めた。LINEは便利ですごく使えるし、LINEPOPも100万点行くくらい上達した。中田さん経由でLINEPOPを始めた人はうちの会社にはたくさんいて、何人もが点数を競い、100万点を目指している。中でも一番ハマっているのは中田さん本人で「ハートののおねだり」というそうそう使わない機能まで使ってハートを集め、LINEPOPをやりに続けた。ただ、中田さんが誘った人がどんどん上達し、100万点に近づき、突破していくのに反し、中田さんは60万点あたりがいいところだった。天性の才能の無さだった。数日前の朝、座っている中田さんがあまりにもボロボロの顔をしていたので、「また二日酔い?」(超酒飲みなので)と聞くのと「違います」と目もあわずに返答。「寝不足?」と聞くのと「違います」と返答。そして、「何でこんな風になったかは言いません。言いません。」と言った。無理して聞くこともないで、「ふーん」と言って、その場を離れた。その晩、LINEで中田さんから「ハートありがとうございました。とりあえずしばらくゲームやめました!」のでいいです。」とLINEPOPのハート拒否のメッセージが。僕はLINEPOPの点数が全然行かないので引退を余儀なくされたのだらうと解釈し、ゲームのしすぎもよくないと思ったので「卒業おめでとう」とメッセージを送った。返信はない。

日曜日、急速、水泳大会に出た。今年に入って水泳を怠っており、1ミリも泳いでないという練習不足だった。逆に水泳仲間のひろしは去年に引き続き、泳ぎこみを続けており、土日に4~5000メートルを毎週泳いでいた。僕はひろしに「これでひろしが俺に負けたら、引退を余儀なくされるよね?」というのと、ひろしも「そうなるね」と言った。僕は勝ち負けより、怪我をしないということテーマに泳ぐつもりだったが、最終的にアップすらしないで泳いだ50メートルのタイムは若干、僕の方が早く。ひろしは水泳からの引退を余儀なくされることになった。その日の最後のレースは50メートル×4人のリレーでひろしの水泳引退レースとなった。ひろしは第一泳者、僕は第二泳者だった。引退レース。抜群のスタートを切ったひろしはがむしゃらに腕をまわし、飛び込み台で待つ僕の方に向かってきた。そのがむしゃらは、とても引退レースを迎える人のそれではなかった。僕はそれを見て心の中で「ひろし、ひろしは余儀なくされてないよ」と思った、そして、ひろしの頑張りを無駄にはできないかと思いつき、タッチと同時に前半から飛びしたところ、後半、練習不足がたたり失速を余儀なくされた。つかれた。そのリレーはどういうくりかいはわからないが3位で銅メダルをもらった。よかった。ひろしも引退する気はさらさらなかった。

中田さんが休みの日、中田さんと仲がいい人に何で中田さんが何故LINEPOPをやめたのか、そして数日前、なぜボロボロになっていたのかを聞いてみると、プライベートで物凄くつらいことがあったらしいとのことだった。どうやら、LINEPOPの点数が引退を余儀なくさせたわけではなさそうだ。(そりゃあそうだ)

僕は中田さんに「何があったかは知らないけど、余儀なくされない場合もあるよ」と言いたいけど、ひろしの頑張りを思い出しながら思った。(中村)

【広告PR】



私と2000円札

バルブラン池田先生の連載小説。現在執筆中。待てない人のために、少しだけ内容を教えちゃう。第1章「出会い」2000円札を始めて沖縄で手にしたあの感動。第5章「販売機」離島でどうしてもジュースが飲みたかったときに、買えなかったときの気持ちを綴る。第3章「裏切り」小淵さんへの思い。第5章「弾圧」2020年、店舗は2000円札を断ってもよい、という法律が制定。第5章「別れ」2000円札仲間の先輩が先立ってしまう。ワリカンの4000円を1000円札4枚で出す先輩。「ごめん…」

最終章「両替」涙なくしては語れない、2000円札の最期。

おたのしみに。

麵屋東京かとむら 川越店



油そばの店。川越丸広百貨店の前です。お好みで、ニンニク油、バター油、オリーブオイルをかけてお召し上がりください。写真が「極み」中盛(1050円)



危うし。ずんちきを切られる

通学路には寄り道する場所がいくつもあった。駄菓子屋、文房具屋、ガチャガチャ、テレビゲーム。子供が多かったために、少なくとも10店舗以上が商店街に存在した。ファミコンを持っていなかった自分は毎日、店を渡り歩いていた。その中で人気2位のきむらやのパンのこた。ここには店内にパン、お菓子、テレビゲーム、外にコインゲーム機が並んでいた。よくやった機種はルーレットだ。メダルがたくさん当たったところで何ももらえないが、当たった時にメダルがガッツンガッツンと吐き出されるのが好きだった。ただ、このルーレットは、イカサマプログラムが仕組まれており、賭ける場所を多くすればするほど”0”に止まる確率があるようになっていた。0に止まったら何に賭けていようともハズレとなる。インチキだ。今思うと、インチキとは感じていたが、懲りずに同じことを何度も繰り返していた。当時からゲーム機に八つ当たりをする癖があったので、この時は叩くだけではおさまらず、店の前に小便をまき散らした。一緒にいた友人が騒ぎ出したので、店主がすぐに表に出てきてしまった。「コラーー!」鬼のキョウソウだった。すると店主はすぐ裏口から店の中に入っていった。懲らしてやるからちょっと待って、という雰囲気。今で言うところ、ヤクザが車に戻って金属バットを取りに戻るのと似ている。予感的中。店主は、金属のタイとハサミと白タオルを持って出てきた。その道具を見て、これらは病院の手術室で使う道具だから、手術をされるんだな。血が出る。恐怖だった。そして、店主が再び怒号。

「チンポこせ!!!チンポこ切ってやるからチンポこせ!!!」

やばい、切られる。

昔話で包丁を持ったヤマンバに追いかけられるような恐怖しさがあった。

結局、逃げて切られはしなかったのだが、学校でずんちきを切られそうになったことをはなし、しばらくヤマンバのセリフが友達の間で流行った。翌日、下校途中に小便をした現場を見るとまだ、小便の跡が残っていた。

20年が経ち、この付近でヤマンバ店主を見かけたことがあった。よぼよぼのじいさんだった。あんなに怖かったヤマンバも推定85歳。パン屋も家建て替えられてしまった。今でもここを通ると小便のシミが道路についていないか確認してしまう。(関根)



図1



図2



図3



図4

朝霞あずま湯

ここで銭湯の紹介。朝霞志木新座の普通の銭湯はあずま湯以外すべてつぶれた。新座のプリムの近く、志木の北口、朝志ヶ丘、三原の松の湯、えびすの志木浴場。あずま湯だけはちょっと特殊で、銭湯の料金(430円)だが、ちょっとコギレイだ。サウナは別料金で、シャンプー、石鹸はおいてはないが、脱衣所がキレイだ。コイン式の駐車場も完備している。せきね、ちゅうそん、ひろしが体中をやけどしたオーブンウォーター後、泡のスプレーを塗ったり、風呂に氷水をはって背中をついたり、シーブリーズを塗ったり、1週間はやけどに悩まされた。こんなときあずま湯に助けられた。この水風呂はスーパー銭湯より5℃くらい低い。たぶん14℃前後。ここに入っている時だけは、背中の痛いゆみから解放された。もし大やけどを負ったら是非あずま湯へ。注意は、9割方ヤクザがいる事。数えているだけで21回中、19回ヤクザがいた。必ず2人組。時間帯限らずいるということは、ヤクザが2人ずつ順番に来ているのだと思う。2人以上いたことは一度も無い。あずま湯は俺の間では、ヤクセンと呼んでいる。ヤクザがいても大繁盛しているこの銭湯。抗争に巻き込まれないのなら、ヤクザいても別にいいか。もちろん、店には「刺青お断り」の貼り紙は無い。

フォーメーションZ

あれは確か、僕が小学校4年生の頃だったかと思います。当時の小学生の間での流行といえば、やはりファミコンなどのゲーム類で、僕も毎日のように学校の友だちや幼稚園児の弟と家でファミコンをしたり、学校の近くの駄菓子屋のゲームコーナーでアーケードゲームをやったりして遊んでいました。

そんな時、僕の心を大きく動かす出来事がこの駄菓子屋のゲームコーナーで起こりました。そのゲームコーナーにはゲーム機が3台あり、学校が終わるとみんなが集まってくる人気のスポットでした。3台の中でも常に群集の支持を集めていたのは、『イーアルカンフー』と『スパルタンX』の2台で、この2台は超ロングランヒットで、いつもゲーム機の前は人だかり。ゲームをやるには常に順番待ち状態。いわゆる駄菓子屋さんのドル箱です。ところが、対照的に残りの1台は駄作の連続。固定客がつかず、気がつくゲームの中身が変わっているという状況でした。

ある時、僕がその店に寄ると、また例のごとくその台には見た事もない新しいゲームが入っていました。お店のおばちゃんの話だと今日入ったばかりだということで、僕は暇つぶし程度に考え、一回やってみるかと思い、2枚持っていた50円玉のうち1枚を投入しました。ゲームの名前は、『エレベーターアクション』。ワンプレイやり終え、僕は思いました。

なんだ、このゲームは。……おもしろえ。

僕はすぐ残りの50円も使いもう一回やりました。今ではなぜだか分かりませんが、僕は、この『エレベーターアクション』に異常なほど興味を引かれていました。ああもつこの『エレベーターアクション』がやりたい、と思いましたが、持っていた50円玉2枚は今月のおこづかいの最後の百円で、次のおこづかいをもらえる日は一週間後。一週間経つ間にゲームがまた変わらないことを祈りながら待ち続けました。

そして一週間後。奇跡的に『エレベーターアクション』は生き延びていました。しかし、どうしたことでしょう。みんなが『エレベーターアクション』の面白さに気づいてしまったのでしょうか、ゲームコーナーの常連の上級生の人たちが、僕が発見したエレベーターアクションを占拠してるのです。その後も『エレベーターアクション』は常に上級生に占拠され、僕はいつも斜め後ろぐらいから背伸びしてゲーム画面を眺めているだけで、プレイさせてもらうことが出来ませんでした。そんながっかりの僕に朗報が舞い込んできました。『エレベーターアクション』がファミコンに移植されるのです。

霊道はともかく、うちの社屋は向かいの病院の小児病棟（昭和58年取り壊し）があった跡地にできたところで、おそらく大きい病院なのでたくさんの子供が亡くなった跡地なのだろう。

近所に鈴木酒店という、酒店なのにその場で裂キイカとかをツマミに酒が飲める店があり、そこの店主のおじさんに当時のことを聞くと、小児病棟の鶴見区への移転が決まってから、病院の地下で火事が起こり、火の粉が飛んできて、自分の店も燃えるかもしれないと思ったという話をしていたことがあった。その火事でも火遊びをして火事の原因となった1人の男の子が亡くなっているそうだ。

そのへんのことを思い出し、本田さんに昼休みに、その話をすると、彼女は怖い話好きらしくて、今から地下に行ってみませんかということになった。地下で一番怖いのは実は5つの倉庫ではなく、1階から地下に降りる階段の下にある天井が三角の一坪ほどの部屋で、会社を建てるときに余ったタイルなんかを保管している倉庫で、あまり知られていない上、換気設備もないため臭く、非常にやばい雰囲気だ。せっかくならそこを見せてやろうと思ひ、そのドアを開けると、同時に建物の給水ポンプか何かの音がグオーンとなり、音に驚くと同時に、急に怖くなり、二人で一階に逃げた。すると1階に一人の5歳くらいの少年がいた。（うちの会社はショールームがあるので親子連れも来ます）

さっきの小児病棟話が利いていて、あまりにも出来過ぎた展開で少し面白くなったが、どこからどう見ても現実の少年だったので、怖くは無かった。

どうやら、親がショールームを見ている間に会社内をウロウロしていたようで、親を見つけると走って行った。

自分と本田さんは事務所がある2階への階段を上った。

下の階からさっきの親子の会話が聞こえてきた。「何して遊んでたの?」「黒焦げの子と遊んでたー」

（中村）

アジロワン

「コルクのライフワークは?」「うーん。そういうものって死ぬときにならないとわかんないんじゃない?」

コルクは3杯目の生ビールで少し赤くなった顔で笑いながら言った。「俺の場合は郵便局、2千円札、泳ぎ、あと最近ではランニング、あとは、、」とひろしが4杯の生ビールと3杯目の日本酒でかなりご陽気になった表情で聞かれてもいない質問に答えた。

ひろしが言うライフワーク4つは第三者の私から見ても、ライフワークだなあと思わせた。そして、ひろしは半月後に迫った御宿での遠泳大会に向け、その中の一つである泳ぎに磨きをかけていた。

毎週土日に5〜6キロ泳ぎ、さらに最近始めたランニングで心肺機能を高めていた。

そして遠泳大会前日、御宿に前乗りしたひろし、関根、やまむ、ささは前夜祭的に海の幸に舌鼓を打ち、酒を飲んだ。

その宿は焼きハマグリが食べ放題でその旨さは日本酒に非常に合った。美味い美味いといつつ、ハマグリと日本酒がすすむひろし。「かーいかいかい、かーいかいかい」と怪物くんのうたと貝をかけて小躍りしながら歌うひろしは泥酔して転倒した。

ひろしが転倒したまま寝てしまったところで会はお開きとなった。ひろしを寝床へ運び、それぞれこの日は就寝した。

翌朝、出発のためロビーに集まるとひろしの顔色が悪かった。「二日酔い?」やまむが聞くとひろしは黙って首を振った。「膝が痛い」ひろしは呟いた。おそらくひろしは小躍りしたときスピンする形で転倒したから、膝を捻ったのではないかと佐々が分析した。おそらくそれで間違いないだろうとその場で皆は結論づけた。

皆はひろしに棄権を勧めたが、これまでの練習を無駄にはしたくないひろしは「海は浮力があるからそれ程キックを打たなくても何とかなる。出場する!」と強行出場を宣言した。

いよいよスタートの時が来た。号砲がなり、出場者が続々と海に入ってしまった。膝を痛めているひろしは小股で歩きながら、少し遅れて入水した。

しかし、皆、御宿の海を忘れていた。御宿の海は泳げる深さになるまで50メートル以上歩かなければならず、その浅瀬は海藻で溢れているのだ。足に絡みつく海藻を健常な出場者は振り切って歩けたが、ひろしの足はそれから逃れることができなかった。海藻が絡みつく足を動かすたびに激痛が走り、顔を歪めるひろし。それを見たボートに乗った係員が事故防止のため、イヤイヤをするひろしを引き上げた。スタートから92秒、約29メートルでひろしはレースを終えた。

全員がゴール後、落ち込むひろしを連れて病院に急行した。ひろしの診断結果は「両前十字靭帯損傷」だった。「両?！」やまむが驚嘆の声をあげた。

ほとんど誰も話さない帰りの車中、関根の娘のまちゃんだけが母親にいかに昨晚のひろしが面白かったかを説明していた。そして不意にまちゃんが「かーいかいかい、かーいかいかい」とひろしが小躍りし、ローリングダウンした歌を歌った。それでも皆黙っていたが、寝たふりをしているやまむの肩は小刻みに震えていた。

（ブログ引用）



天才の倒し方

大学時代の後輩が監督をつとめる水泳部がとにかく強度と量に重きを置いてきたトレーニングをやめて、技術トレーニング中心の練習メニューに変更。生理学的要素を鍛えるような高強度トレーニングは専門種目外でスイムとウエイトやパワーマックスで代替。とうり新しい形にチャレンジしています。

僕は水泳界が次に向かう方向はこちらになると思っています。いくらたくさん泳いでも、センスがない子はいつまでたっても技術は身につかないのです。僕が考えるセンスとは「教えられなくても、自覚しなくても、たくさん反復することで正しい技術が勝手に無自覚に身につく能力」のことです。そしてこれを持っている人のことを天才と呼びます。ごく限られた人のみですが、たしかにこれを持っている人が世の中には存在します。そういう子たちは泳げば泳ぐほど速く

なるでしょう。でも僕も含めた大半の人間はそうじゃないんですね。

天才ではない僕たちは勉強して自覚して正しい動きを作っていくしかないんです。たしかに時間はかかるでしょう。でも、きっと自覚して身につけた技術は崩れにくいし、その過程はきっと人生の糧になる。

現在、スポーツ界で「名選手が名コーチであるとは限らない」のは事実だと思います。でもこの原因の根底は「天才が勝っているから」だと思うのです。彼らは無自覚に出来てしまっていたことなので、なぜ自分が人よりうまく出来るのかを説明することができません。ですから当然他人に指導することはできません。

これから先、水泳を離れても何かにチャレンジすると必ず天才が現れます。仕事でも芸術でも他のスポーツでも。彼らは本当にすごい。僕だって羨ましい。でもそれを嘆いていても仕方がない。「センスがない以上、自覚して分析して、分解して意識して変えていく。」この方法が必要なんです。それが僕たち凡人が持ち得る、唯一の【天才の倒し方】だと思います。（引用）

くじ引き

小学校1年生の時、僕は駄菓子屋のくじに取り付かれていました。

毎日、ぼくのおばあちゃんがくれる50円で『イーアルカンフー』や『アイスクライマー』の紙で出来た下敷きがもらえるというくじをやっていました。

くじは1回50円。お小遣いの全額です。しかし、全然当たりません。だから、駄菓子屋のおばあさんに「これほんとに当たり入ってるの?」と問い詰めました。すると、「入ってるわよ。こないだもひろし君、ほら知ってるでしょ?あの子が当てたばかりだよ。」その言葉を聞くと、僕は家に走って帰り、「おばあちゃん、おばあちゃん、300円貸して!一生のお願い!出世払い出世払い!」兄の良く使っていた言葉を利用し、どうにか借りてリターンT.O駄菓子屋。「これと、これと、これと、あっ、これ。」6回くじを引きましたが、全てはずれ。僕は頭が完全にイッてしまい、はずれ賞のガムをドブに投げ捨てるど、家にリターン。「おばあちゃん、おばあちゃん!」叫びましたか返事が無い。裏庭を見ると、おばあちゃんは曲がって固くなってしまった腰で、洗濯物を大変そうに取り込んでいるではないですか。その時、僕の頭の中で聞こえた言葉。

「チャンス。」
おばあちゃんのいつも座る席の戸棚を物色。「さっき確かこのへんから出してたよな…」と心の中でドキドキしながら探索するうちに金脈を発見しました。500円、100円、50円と、僕は握れるだけのコインを握って、家を出ようとしました。すると、玄関にはおばあちゃんが。駄菓子屋に行くこうとする僕におばあちゃんは、「何やってんの、お金なんか持ち出して!やめなさい、ダメ!」と言い、玄関の戸をピシャリと閉めました。この行動にキレた僕は、「うるせェクソババァ!どけっ!」おばあちゃんを突き飛ばし、さっきの駄菓子屋へ。肩で息をしながらくじを全部買い占め、片っ端から開けると、結局当たりは1つだけ。それでもすごーく嬉しくなって、公園で手当たり次第に下敷きを自慢して歩きました。気がつくと辺りは真っ暗になっていました。

僕は喜びという感情に支配され、ニコニコしながら玄関を開けると、父が仁王立ち。そして、怒りの鉄拳。一瞬、目の前が白くなりました。初めて父から殴られました。しかもグーです。小学校1年生の子供を、グーでぶっ飛ばぐらゐ殴るほど、父は激怒。「お前おばあちゃんに一体何をしたんだ!」と怒鳴り声。はっと我に返り、次から次へと涙がこぼれるや否や、「おばあさんごめんなさい!」と大声で叫んでいました。そして外へ飛び出し、道路を裸足で走り出し、「おばあちゃんごめんなさい、おばあちゃんごめんなさい!」と叫びながら、走り続けていました。そして1時間ほどした所で父に「もういいから」と取り押さえられました。おばあちゃんは僕に突き飛ばされ、足をくじいていました。僕はおばあちゃんに何度も何度も謝りました。おばあちゃんは「怒ってないよ。ばあちゃん、自分で転んだんだから。」

あれ以来、全てのギャンブルを許せなくなりました。現在浪人中です。おばあちゃん、申し訳ない。僕は、僕は大丈夫なんでしょうか?（引用）

10円

ドリンクバーがまだ世の中に浸透していなかった頃、僕ら子供たちにとってジュースは今よりずっと特別なものだった。缶ジュースは高いものだったし、家にジュースが置いてある家は恵まれた家だった。自分は特に貧乏だったので、家にジュースが置いてあることはなく、たまの日曜日にスプライトを買おうとなるのが楽しみなぐらい、ジュースを買うのは稀だった。日常は駄菓子屋にある10円の粉のジュースをなめて、ジュース欲を満たしていた。理科の溶解の実験でバインの胎を水に溶かしてジュースになった事や、牛乳屋の自動販売機に40円ジュースがある、土曜日の部活は弁当＋100円のジュースを買うる、などなど、ジュースの記憶が多く残っており、小中学生の時はジュースに支配されていたことが良くわかる。

高校に入りゴールドラッシュ的な事が起こった。10円で250ccのジュースが買える店があるのを発見した。駄菓子屋でもなく、商店でもない、元酒屋と思えるような小さな店だった。その小さな冷蔵庫に、得体のれないジュースが置かれていた。普通のポカリスエットも80円ぐらいで置いてあり、すべてがゲテモノジュースではなかった。10円ジュースは2種類あり、青リンゴとジンジャーエール。瓶入りの炭酸ジュースだった。味はというと、おいしいとは言えない。10数本買って、水泳部員に飲ませた。うまいという者は誰もいなかった。その時は何かの魔液?副産物的な汁をジュースにしたのだと思っていた。

ある時、友人がビックニュースを持ってきた。「10円でコーヒーが飲める」その場所は、自転車通学の途中にあるという。そして、学校の構りに「10円コーヒー」の店に寄った。学校から15分ぐらいの場所だ。たしかに、いつも通っている道に、それはあった。元デイリーヤマザキのような感じの店構え。

「ここだよ」と見ると。友人が言った通り、入り口の戸に、「10円のコーヒー」と、雑な手書きの紙が貼られていた。店のばあちゃんかじいちゃんが書いたのだろう。この店の感じだと、缶コーヒーなどではなく、紙コップに1杯10円とかそんな感じかな?と想像した。でも、貼り紙をよくみると、

「10円コーピー」

「10円コーピー」

「10円コーピー」

僕はそれを聞いてすぐに、エレベーターアクションは、『私の選ぶ・俺の次買うカセットコンテスト、僕の欲しいゲーム部門大賞』に選ばれました。

それから発売日までの日々は、おばあちゃんとお母さんの財布からお金を毎日気づかれないぐらいちょこっとずつ抜き取るというバイトを一生懸命して、お金を貯めました。

そしていよいよエレベーターアクションのファミコンの発売日がやってきました。

その日は学校があったので、学校が終わってから買いに行ったんじゃ絶対売り切れる、と思った僕は、その日幼稚園が休みだった弟に、「おばあちゃんと一緒に朝10時に駅前のおもちゃ屋へ行ってエレベーターアクション買ってこい。」と言い、おばあちゃんにお金を預けました。

おばあちゃんは、「このお金どうしたの?」と聞いてきたので、この前家に来た親戚のおじさんにもらったと嘘を言い、おばあちゃんを軽く説得しました。

その後僕は学校に行きましたが、授業中も主人公がロープでスルスルと降りてくるオープニングのシーンが頭の中で駆け巡り、完全に上の空でした。

そしていよいよ学校も終わり、僕はダッシュで家まで帰りました。家に着きゲームのある部屋に入ろうとすると、聞き慣れないゲーム音が聞こえてきました。

「弟のやつ、早速やってやがるな。」と思ひ部屋に入りました。

おや?

テレビを見た僕は、どうも様子がおかしいことに気づきました。確かエレベーターアクションは縦スクロールのゲームのはずなのに、テレビ画面に流れる映像が横スクロールしています。確かエレベーターアクションのフィールドは全てビルの中のはずです。なのに、草原が映っています。

「はは〜ん、ファミコン版は面が進むと外に出て主人公が草原を跳ねたりするのか」と思ひましたが、僕の目がファミコン本体に行った時、異変に気づきました。

本体には見たこともない赤いカセットが差し込んであります。僕は「タイトーのカセットは全部黒のはず。なのに、赤?」と思ひ、横に目をやると、無造作に放られた空き箱、そして大きく『フォーメーションZ』とタイトルが書かれています。

何度見ても、フォーメーションZ、と書いてあります。僕は何が起こったのか分からず、目の前でゲームをやっている弟に、「おい、おい。なんだよこれ?」後ろから問いかけましたが、弟は無言でフォーメーションZらしきゲームをやり続けています。僕が何回か弟に聞きただしているうちにおばあちゃんが部屋に入ってきました。「どうしたんだい?」「おばあちゃん、おばあちゃん、何これ?あのさ、僕が頼んだエレベーターアクションは?」「Aちゃん(弟)がこっちの方が面白いって言うからこっちにしたのよ。」

それからどれぐらい間があったのか覚えていませんが、僕は僕でなくなっていました。「ふざけてんじゃねーっ!!」僕はゲームをやっている弟の頭を後ろから思い切りはたき、ものすごい勢いでファミコン本体へ手を伸ばし、イジェクトレバーを押さずにカセットを引っこ抜きました。そしておばあちゃんに「今すぐ店行ってエレベーターアクションと取り替えてこい!」と言って、赤いカセットをおばあちゃんめがけて思い切り投げました。当たりました。首から上に。ガツッという音がして、その後おばあちゃんはずくまりました。しばらくして顔を上げると、おばあちゃんの額に赤いものが見えます。僕は最初、カセットの塗料が落ちてこびりついたんだと、思い込もう、思い込もうとしましたが、頭血です。それからどうなったのかを、本当にきれいに覚えていません。が、夜、親にさんざん怒られたのと、泣きながら『フォーメーションZ』をしばらくやっていたのだけは覚えています。（ちゅうそのの好きなはなし）

おばけ

今朝、会社で体操をしていると（うちの会社では放送をかけて、皆で体操をします）、隣にいた女の子の本田さんが、「中村さん、会社の地下にオバケが出るってホントですか?」と聞いてきた。

あまりにも唐突だったので気の利いた答えも思いつかず、「え?知らない。何で?」と尋ねると、「宮崎さんが噂でそういうのがあるって言ってたんですよ」とのことだった。宮崎は6つくらい下の後輩で、おそらく本田さんを怖がらせるために、ついたウソだと思われた。

ただ、それを聞いてから、数年前に地下駐車場であったことを思い出した。

うちの社屋は地上3階、地下1階の建物で地下は40台くらい停められる広い駐車場になっている。駐車場の脇には5〜6メートルごとに5つの金属の扉が並んでおり、その中は各課の倉庫になっている。通常は鍵がかかっているが、鍵は誰でも取れるところに置いてあるし、5つの扉の鍵は共通だ。

その日、自分は探し物があり、一番手前にある倉庫に行くため、夜の8時くらいに地下に降りた。30mくらい先の一番奥の倉庫の扉が10cmくらい開いていて、自分が見た瞬間くらいに、パタンと閉まった。その閉まり方に、何か「はしゃぎ」みたいなものを感じ、誰かがかくれんぼでもするようにわざとらしく隠れたと思ひ、用は無かったが一番奥の扉の所まで行き、ノブを回した。すると鍵がかかっていた。中から鍵をかけたと思ひ、持っていた鍵で扉を開けると、真っ暗だった。こいつ怖くないのかよ?と思ひ電気をつけると誰もいなかった。ぞーっとしたが、何となくドアが10cm開いていたこと自体が気のせいだった気もしてきて、そのことはすぐに忘れてしまった。

それを数年ぶりにオバケ質問により思い出してしまった。

うちの社屋は国道一号線を挟んで病院の向かいにあり、その裏は数十メートルいくと山になっていて、山の頂上にはお寺がある（新興系らしいけど）。だいぶ前だがちょっとオカシイ女子社員がいて、「病院で亡くなった人の霊が、あの山に向かうときうちの会社は霊道になっている」と言い出し、実際、社屋内で霊を見たくらいのことを言ってた。その人は霊だけじゃなく占いか、おまじないみたいなものにも相当はまっていたので、単なるオカシイ人として見ていた。その人はいつの間にか辞めていた。